

第3 問題作成部会の見解 倫理

1 問題作成の方針

問題作成部会（以下「本部会」という。）の問題作成基本方針は、これまでどおり、「高等学校の段階における基礎的な学習の達成の程度を判定する」という大学入試センターの目的を踏まえ、「良識ある公民として必要な能力と態度を育てる」という高等学校学習指導要領（以下「学習指導要領」という。）における「倫理」の目標を念頭に置くことである。これらに留意しつつ、高等学校で得られた基礎的知識を踏まえて、人間としての在り方、生き方、更には、現代に生きる人間の倫理的課題等について、深く考えさせる問題の作成に努めた。

設問形式は昨年度に引き続き、五つの大問から「現代の諸課題と倫理」と「青年期の課題と自己形成」を一つに統合することにより、四つの大問とした。

各大問には、学術的な深みがあり、現代的なメッセージ性に富むリード文を置いた。リード文の編成に当たっては、明快な論旨を目指し、問題によっては対話形式を導入することにより、受験者に身近で現実的な内容となるよう工夫した。

作題に当たっては、学習指導要領の目標及び内容に適合していること、それに準拠した教科書や学習内容に即した問題であること、リード文は、メッセージ性を持ち、「倫理」を学んだ受験者の思索の糸口になるようなものであること、基礎的・基本的なものから総合的な思考力、判断力及び応用力を問うものまで、バランス良く出題すること等に心掛けた。

2 各問題の出題意図と解答結果

第1問 本問では、青年期の課題とも言える自立をテーマとして取り上げた。自立は、個々人で達成すべき課題と捉えられることが多いが、実際には、様々な社会関係に支えられなければ成り立たない。そこで、リード文では、支援における相互承認の側面や社会保障制度及び地域的つながりなどに着目させることを通じて、自立が支え合いという倫理的テーマと不可分であることに気付かせ、現代社会における自立した生き方について考えさせることを目的とした。出題意図については一定程度伝えることができたものと考えている。

他の設問については、リード文の趣旨を踏まえつつ、青年期の問題や現代の諸課題・思想についてバランス良く問うことを心掛けた。新しい試みとして、問3では、グラフの表面的な数値に惑わされずに本質的な読み取りができるかを問いつつ、青年期に関する知識をも問うという応用問題を設けた。平成22年度公示の学習指導要領への移行や、現代における青年期の持つ重要性に鑑みると、こうした出題の必要性は今後も一定程度あると考えられる。また、リード文の趣旨を敷衍する意図から、問4ではフェミニズムの観点から社会的不平等について論じるエヴァ・フェダー・キテイの文章について出題した。教科書での記述が少ない分野ではあるが、受験者にとって身近な内容であったようだ。その一方で、社会の公正さについて問うた問6については、多少踏み込んだ理解を必要とした。自らの生活経験に照らして解答できる問題は得意とする一方、図表からの読み取りや論理的思考力が求められる問題については苦手とする受験者の様子がうかがえる。

第2問 源流思想分野を対象とするリード文では、仏教・キリスト教・イスラーム教・中国思想・古代ギリシア思想において、他人を助けることの社会倫理的側面及び個人倫理的側面について述べたリード文を読んでもらい、他人を助ける実践という日常的な倫理的行為の在り方について認識を深めてもらうことを目指した。全体としての出題意図については、十分受験者に

伝わったものと考えられる。様々な制約の中で、リード文の趣旨に可能な限り即した設問を用意し、基本的な知識の暗記だけでなく、各地域の古代思想が持つ倫理的な意味を問うことに留意した。

問1（イエスの愛の思想）、問3（イスラームのラマダーン）、問5（ギリシアの幸福論）のように受験者にとってなじみ深い定番的なトピックを扱った一方で、問4（大乘仏教の基本思想）や問5（孟子の四端）では、ややなじみの薄い分野を扱った。問4は基本タームの深い理解を必要とするやや難しい問題であり、問5は易しい知識問題であるという違いはあるが、なじみの薄い分野では理解が十分に行き届かなかったのではないかと考えられる。

第3問 日本の先人たちにおける死生の問題をめぐる思索を通して、現世における有限な生の意味を見つめ直させることを問題作成の方針とした。この方針の下、古代から近代に至るまでの日本の倫理思想を概観できるように出題した。

一遍に関する基本的な理解を問うた問3は、教科書での記述は少ないながら、鎌倉浄土思想の特色についての理解を深めることの必要性を示すものである。また、問4で問われた富永仲基・山片蟠桃も教科書での記述の少ない思想家であり、加上説や大乘非仏説論という日本の仏教理解における重要な視点を問うた出題であった。明治初期の啓蒙思想家を問うた問7で扱っている、近代日本における哲学・倫理や道徳を考える上で重要な人々については、理解を深めていく必要があるだろう。このほか、内村鑑三のキリスト教理解を問うた問8で、彼の主要な所説であるところの「二つのJ」を「イエス（Jesus）と正義（Justice）」と誤って解答する受験者がいたとすれば、明治キリスト教の特徴としての「日本（Japan）」への親近性についての理解が必ずしも十分ではなかったということになると考えられる。

第4問 近代西洋思想分野を対象とするリード文では、個人の生や社会での在り方を適切に把握する上で理念的なものが持つ意義を、改めて考えさせることを企図し、理念的なものをめぐる近代の思想をたどった。全体としての出題意図については、一定程度、受験者に伝わったものと考えられる。

個々の設問においては、基本的な知識が習得できているかを確認しつつも、可能な限りリード文の趣旨に対応させるべく、西洋近代の様々な思想家が、いかに理念的なものをめぐる思索を行ってきたかを、その倫理的な意味の理解を中心に、問うことに努めた。教科書に記載されている事柄であっても、観点を変えて問うことで、受験者による理解度の違いを如実に確認することができるということが分かった。

3 出題に対する意見・評価についての見解

外部評価分科会及び教育研究団体より、試験問題の内容・範囲、試験問題の分量・程度、試験問題の表現・形式等、多面的に意見・評価を頂いている。以下、要点を絞って本部会の見解を述べる。まずリード文を置く出題形式について、「受験者に対して倫理的課題を問いかけるものであり、『倫理』を学んできた意義を再確認できるよう工夫がなされていた」との評価と共に、「例年どおり丁寧に書かれて」いた旨の高評に加え、「次年度以降も是非継続していただきたい」との励ましを頂いた。本部会としてはこの出題形式を今後とも踏襲する十分な理由を持っていると判断したい。

一方、リード文の内容については、「心揺さぶられる、よく練られた良問」、「人助けの意義が受験者に伝わるリード文」、「生と死というテーマに沿ってうまくまとめられている」、「自分自身や世界の在り方を常に考えていくことの必要性をコンパクトにまとめ」ている等、その評価はおおむね良好である。本部会としては及第点を頂いたものと考えたい。総合的に高評価ではあっても、今後とも本部会の一層の努力が要請されることは言うまでもない。

個々の大問・小問については、良問であるとの評価を受けた場合も多々ある。曰く、「女性の社会進出と家庭との関わり、介護保険制度、バリアフリーと障がい者支援そして若者の就業問題などへの理解を求めた素直な良問」。曰く、「主題も倫理の題材として適切な設定である」。曰く、「今後、キテイは教科書や資料集に取り上げられることになるだろう」。この一文を肯定的に受けとめたのは、本部会による問題作成が良い意味での試行となることへの期待があるからである。試験問題の分量・程度等についての箇所では、「受験者にはなじみのない哲学者エヴァ・フェダー・キテイ」と言われてもいることはよく承知している。また曰く、「科目の特性に照らして適切な問いである」。曰く、「基礎的基本的ながら、丁寧に思想をたどることの大切さを伝える良問である」。曰く、「高校生には『倫理』を学ぶ際の手掛かりとなるだろう」。

しかし、その一方で、本部会の一層の努力・工夫を要請する意見もないわけではない。曰く、「教科書での記述は少なく、多くの高校生は迷っただろう」。曰く、「用語だけを問うのではなく……思想や時代背景なども併せて問うなどの工夫を期待したい」。曰く、「時代背景や……経緯などにも触れた選択肢を用意して高校生の深い学びを求める方が出題としては望ましい」。曰く、「人名だけを問うのではなく、……思想や……流れなどの背景もいかした選択肢の設定が望ましい」。曰く、「選択肢において……思想についてもう少し提示してもよかったかも知れない」。本部会としては、これらの意見の持つ問題作成上の意味と内容を十分検討した上で、今後の問題作成にいかすよう努力したい。

試験問題の分量・程度等について、グラフ問題との関連で意見を頂いた。曰く、「第1問の間3グラフ問題、『将来の自分の姿』で、図の示す結果を説明した選択肢の文章がそれぞれ数行にわたっており、正確に読み取って判断するのに受験者は多くの時間を必要としたと考えられる」。このような意見の背景には、今年度の特徴として選択肢の数が増えたこと、一つの選択肢の文章が長くなったことなどがあると思われる。まず、グラフ問題自体は、平成22年公示の学習指導要領への移行や、青年期における現代的問題（自立に関わる悩みや不安）を鑑みると、こうした出題の必要性は今後も一定程度あると考えられる。その上で、多くの時間を必要としたのではないかと外部評価分科会の懸念は本部会としても看過できないであろう。

また、全国公民科・社会科教育研究会からは、「科目の性格からしても、ほかの科目以上に『考える』という知的な営みを大切にするだけに、平均点がある程度高くなるのは当然である。平均点を気にするよりも、今までにも増して良い問題を提示し、高校生にもの考えることの大切さを伝えてほしい」という意見があった。本部会としては、適切な難易度となるよう努力しているが、今後ともより適切な問題となるよう努めてまいりたい。

試験問題の表現・形態等については、一般化して言えば、「出題者の考える問題の難易度と受験者の学力レベルの乖離^{かいり}や、難易度は考慮せず出題形式で配点を決めていると感じさせる部分もあった」との意見を頂いている。本部会としては、今後とも学習指導要領の内容に即するとともに、地道に学習した者が力を発揮できるような出題に努力したいし、配点と出題形式の間に齟齬^{そご}がないようにより慎重に問題作成を進めたいと思う。

以上、本部会の見解を述べてきたが、外部評価分科会からは「全体的には、本試験同様、総合的な力を問う良問や意欲作も多く、評価できるものである」との総括的な評価をしていただいた。本部会としては、評価していただいた諸点は今後とも一層の改善を加えていくと共に、指摘された問題点・懸念等については、よくその内容を検討しつつ、より良い問題作成に生かすべく引き続き努力してまいりたい。

4 今後の問題作成に当たっての留意点

各方面から頂いた意見、指摘、評価などを参考にしながら、以下の諸点に留意して、今後の問題作成に努める。

- (1) これまで同様、分野別・時代別等においてバランスの取れた問題作成に努める。
- (2) 基本的知識を基にしながらも、変化する社会に対応できる理解力、思考力、応用力を問う問題作成に努める。
- (3) 評価の高いリード文に基づく設問は継承しつつも、更にそれを洗練させるよう改善を重ね、リード文に密接に関連した、受験者に深く思考させる設問の作成に努める。